

投稿⑫

旅は人  
旅は人生

久良岐乳児院

長谷川 正弘



# 博物学・妖怪学

わたくし 私には相変わらずの中途半端さがありますが、ひとじだいまえ 一時代前の博物学的分野への興味があります。お子ちゃま時代の名残りかも知れませんが…、『子供の科学』レベルでも無いと思っています。

博物学とは、一般的に自然に存在するあらゆる物について研究する学問で、広義には自然科学の総てであると考えて良いと思います。狭義には動物・植物・鉱物や岩石など、博物学に於ける「界」は動物界・植物界・鉱物界の3界であると言われています。日本では、明治期に入って自然物についての収集及び分類の学問として捉えられましたが、基本東アジアに博物学の伝統はないと言ってよい様で、東洋で云う処の「本草学(=漢方や薬膳の学)」がいおゆる 所謂「博物学」と同一視されていた処があり、みなかたくまぐす 南方熊楠 等の いおゆる 所謂「ナチュラリスト」の存在が其れであると思います。そして私が現代的に思う処の博物学は、よりアマチュア的自然科学であると考えている次第で在ります。但し、周辺の技術の進歩により、高性能望遠鏡が買える環境に在り、天文台迄建設できる財力があれば、専門家でなくてもプロに近い超アマチュアが新星を発見できる時代の自然科学と思うのです。換言するなら、月刊誌『Newton』的レベルの自然科学に対する現代知識と言うべきかと思っています。

因みに私、父からの贈り物で昔？は石と云うか、鉾物・鉾石・溶岩・隕石等を小石レベルで無くガラガラと持っていて眺めたりしていました。また、山を構成する岩・砂・土壤に興味を持ったり、山繋がりで見望気していると更に、天文・太陽系惑星・ブラックホール・銀河・星座・流れ星(流星)・彗星(ほうき星)・流星群・天の川・天気・気象・雲・天変地異にも興味があったし、また山川草木さんせんそうもくと云うが、樹木や草花野草と云うより高山植物 所謂植物にも興味を持っていました。そして、生物・昆虫・動物・野鳥等、更に、地形・地層・造山運動・火山活動・地震などにも多少なりとも興味があり天変地異にも喰いつきました。火砕流を浴びて迄観たいとは思っていませんのでご心配なく…。例えば、嘗て死火山・休火山・活火山と其の山の火山活動の具合で上記の3種類に分類していましたが、富士山は3分類の内どれでしょうか…。お解りになりますか、ヒントと云うより答は『箱根旅』に在りましたが…。まっ、此の分類も博物学時代の分類で現代では曖昧さがあるとのことで使われないようです。と云う訳で因みに、褶曲しゅうきょくの具合が綺麗に見える地層を見ることができたり、断層帯等が見られると意外と嬉しい気分になれるのです。其れに地理や地学で習った様な、まさに其の物の地形に出会えるのも嬉しい事なのです(河岸段丘・海岸段丘・扇状地・デルタ地帯→三角州・カール・モレーン・隆起準平原・土石流堆積地形・リアス式等々)。此れ等(1ページ16行目「因みに」以降)がひと時代前の博物学的分野に入っていました。

今日こんにちの学問分野としては、夫々が更に細分化され、更に深く探究・研究・解明されるに至っているようです。例えば、天文学と云う言葉があり一学問分野がありましたが、現代では宇宙工学・宇宙物理学・位置天文学・天体力学・天体物理学・銀河

天文学・恒星天文学・惑星科学・電波天文学・赤外線と紫外線夫々の天文学等々と云う様に分野の細分化が起っているのです。諸々の角度から突き詰めていくと学問分野は細分化するが、ざっくりと博物学・天文学と言っていた、一時代前と同じような無限の可能性や無限で豊富な未知なるものを秘めていると云う意識に憧れることが出来る事が好きなのです。今や解決済みの事柄も多くあるのですが…、其れだって角度を変えてみれば未知かもしれません。ですから、この世に絶対普遍的なものが存在するかを問うてはいませんが、解かったようで解らないことがまだ沢山あると思える現実を大切にしたいと思うのです。ですが一方で、月刊誌『Newton』レベルの自然科学を現代の博物学的知識と言うべきかとも思っているのです。常識的に習ってきたことが違っていたと云う事も、私にとっては好きな事です。其れは、別に此れ迄この事実を実しやかに語ってきた人々に対し「ざまーみろ」等と云った気持ちではなく、新しい常識ができた事に対する、喜びと云うべきと理解しています。

因みに、私が憧れた人物の一人に串田孫一さんと云う方が居られました(2005.7.8 没)が、ご存知ですか。この方が、また博物に造詣が深く、その随想の中でも多くの自然物について表して居られるのです。嘗て小学校6年の頃、シジュウカラについてホオジロやメジロとの違いを中心に、シジュウカラの地鳴きまで書いて教えて下さったことがありました。その葉書、未だに大切に持っています。この方からも山への憧憬と云うことを習いました。小学校高学年からその存在は知っていましたが、小さな駅の駅前の小さな本屋さん(実は殺人事件があって消滅しましたが…)で氏の著書『若き日の山』と云う山関係の随想集を中学一年の頃買って読んだのが山への始まりでもあり、博物と云うものへの認識の始まりでもありました。串田孫一氏

は前述の通り、山と山繋がりの博物に造詣が深く、その随筆をはじめ独特の絵をも描く方で画集や画文集や詩集・物語等をも多く執筆され、私は買い集めました。そして、今は限定出版の画文集 いや画集『雲』を大切に持っています。其れ以外はその他の山の本と一緒に山から下りると決めた或る時、本棚一杯一斉に処分してしまいました。がしかし、今になって再び「山と溪谷社」から出版され、ヤマケイ文庫として元々の出版社ではないが『若き日の山』『山のパンセ』『山の独奏曲』など夫々が復刻再販されているのに気が付き、つい買ってしまっている今の私です。よく文庫化されると、挿絵や写真が省略されることがありますが、ヤマケイ文庫はそのまま縮小した感じで何もなくなっていないのが好きです。但し、何度となく読んだはずの本たちであり、しかも一度は手放したのに、節操なく再び懐かしく手元に置いてみたくなったので…、これを我儘と云うべきか…。

さて一方最近、今更のように恐らく安い天体望遠鏡の部類を付録で貰いました。CBCの『大宇宙』とか云うテレビ・シリーズのDVDセットの付録ですが、ある意味付録が魅力でDVDを買った様にも思います。家の二階のベランダから南の空を眺めたいと思って…。以前はよく屋根に昇って居ました。武蔵境の家でも、久我山の家でも昇っていました。特に何が見たいと云う事もなく、特に何が見えたと云う事もなく、坂道の途中にあった久我山の家では、よく10段程上にある子どもの居ないお隣のおばさまに屋根に昇って居た私の事を私が二十を過ぎても言われていました、が恐らくは今考えればご迷惑だったのでしょう、別に覗いていたわけではないですが、家の中丸見えてから…。二階のある家に憧れていたのかも知れませんが、今や生まれて初めて二階建ての家に住んでいます。しかし、此の五年、二階に上がって外を眺める余裕

が殆どなく過ぎています、その理由の一つに今の家の二階は同行者<sup>どうぎょうしゃ</sup>の部屋と二人の子どもたちなり、その子どもつまり二人の孫が泊りに来た時用<sup>き た と き よ う</sup>の部屋が二つ空き部屋として在り、風を入れたりはしているようですが、日頃は開かずの間で二階は私のテリトリーでないからでもあります。時にコソッと私の部屋からはみ出したものを置いて怒られても居ますが…、此れは怒られてはいないのですが、例えばその望遠鏡なども…。

今更天空への憧れに戻ったのは大空を眺める事によって、大自然への憧憬を膨らませる事から再開しようかと思ったからで、今や左膝と右肘に障害があり、自信も無く山へ戻る事は不可能の様思ったからです。そして、今は冬、春・夏・秋より冬の方が遙かに空も障害物が無くよく見え、ちょっと寒いですが惑星や星座の確認も易いから天文から入ることにしたのです。

一方気象については未だに現役、毎日天気図をつける程ではないですが…。新聞でもテレビでも予報は兎も角、天気図を読んで、予報が正しいかを確認しているのが現状です。概ね正しくても、地域によっては局地的に低気圧が発生したりすることで天候が予報を裏切ったり、「所により…」の所に入ってしまう可能性があるのもその地域のいつ頃が または如何なると局地的な天候の急変等が発生する可能性が高いかを知っておく必要はあるのです。そうした地域的な違いや特性は地形的特性が齎す<sup>もたらす</sup>場合もあると考えています。因みに、通常お天気は西から変わると言われますしその通りなのですが、其れは地球的・北半球的又は日本全体を通して観た時の傾向・一般論であって、地点的に観ると東から西も無い訳では無いけれど、解かり易くは南から北に又は北から南へ代わると言える地域がある様に感じています。川の流

れや大きな自動車道路(一般道)があるとその上空には雲が起り易い様で、例えば多摩川上流で発生した低気圧による雲が河の流れに沿って下りますがその次、丹沢大山が切れる辺りから相模川・境川に沿って湿った海風が北へ吹き込む様で、南北に流れる相模川、境川沿いに平塚・相模原から多摩丘陵を迂回し『よみうりランド』辺りを経て北上し、所沢方向へ雷雲が移動するのを経験しています。これは冬の出来事 正月の事ではありますが、高幡さん(真言宗智山派別格本山、高幡山明王院金剛寺)に居た我々は怪しい暗雲に追われる様に洗濯物を外に干していたこともあって、家路を急ぎ帰りましたが、黒雲から逃げられずその北東に在るわが家に着くと同時位にわか雪に遭う、そんな事もありました。湿った海からの気流と冬の冷たい空気がぶつかり更に雷雲と云うか雪雲が拡大していきました。海からの湿った空気は、南風に乗ったと云うより、北の冷たい気団に吸い込まれたと言うべきかも知れないと思っています。よくその中間(よみうりランドと吉祥寺)に在る調布と云う所に雹が降りますがこれは其の夏バージョンと考えて良いと思います。一頃、環八(=環状8号線)雲が取りざたされていましたが、世田谷は多摩川辺りの環八上空で発達した雲は季節風に乗って川口方向へ北上し、荒川環八上空辺りで発生した積乱雲は環八に沿って南下するのです。神奈川県で言えば箱根を越えた雲は丹沢山塊に並行して普通に東へ進みますが東京湾岸で海水蒸昇の気流があって雲の東進は其処で阻まれる事になります。三浦半島は全域が海に囲まれていて雨が降りやすく不安定な天候は必然ではありますが、片側だけが東京湾岸に面している地域では西から発達してきた雲が足止めを喰らい、更に水分の多い蒸昇気流と競合して、金沢・磯子・港南・南・中央・西の各区辺りやチョッと内陸の保土ヶ谷辺りは突然の激しい雷



雨に見舞われる事になるのです、其れも斑に…。其れが冬であると、其処に寒さが加わり、雪になる事もあるわけです。また都筑・緑辺りの区も天候急変がありますが、此れはまた山がちという地形的条件があるからだと考えています。第三京浜道路で冬場雪に出会うのは東京側からも横浜側も昇り切った都筑インターが最高点で正にこの辺りなのです…等と云う訳で、従って気象や雲については相変わらずの興味を持ち続けていく事になります。

そして日常の会話によく出てくる、太陽と月の出入りと特に月については其の満ち欠けについては毎年同じ会話を繰り返すのも何だか？…なので、何故そうなるのか、今後は如何なるのか、を付して説明的に日常会話をする様にしていきたいと思ひ、実はかなり以前から毎年11月中旬には刊行される国立天文台編纂丸善発行のよくとしぶん『翌歳分の『理科年表』等を片手に(=基に)、日常会話をするように心掛けているし、今後も日常会話・季節の挨拶も博物学的にしていきたいと思ひているのです。歳をとり頑固親爺・屁理屈親爺等と思われるかもしれないけれど、四季のある日本、いつも同じ時間に家を出ても朝暗いうちに出勤する時期もあれば既に陽が昇って暑い中の出勤もある、そして体感の差異はあるにしても丁度良い季節もある日本です、暑い・寒い・明るい・暗いだけの挨拶にはしたくないなと思ひだけなのですが…。

因みに、如何せ天体を観るのであれば先ずは我が太陽系の天体から見てみようと思ひます。この付録の天体望遠鏡ではそれも無理であろうとは思ひますが、手ごたえがあれば更にもう少し精度の高いものに変えるとして…何処まで見えるのかを、近いものから確認してみたい訳です。但し、歳せの所為か目もショボついてきており、この目で果たして見えるのでしょうか…と云う問題は別にあるのですが…。

動物や植物については、動物園や植物園に行く程度ではありますが、特に武蔵野の雑木林を構成する樹木については、<sup>くぬぎ</sup> 椴<sup>なら</sup>・<sup>ぶな</sup> 檜<sup>かし</sup>・<sup>しい</sup> コナラ・<sup>まき</sup> 樺<sup>けやき</sup>・<sup>すのき</sup> 椎<sup>とちのき</sup>・<sup>けやき</sup> スダジイ・マテバシイ・ソロ<sup>し</sup>・<sup>で</sup> タブ<sup>し</sup>・<sup>で</sup> 四手<sup>し</sup>・<sup>い</sup> イヌシデ<sup>い</sup>・<sup>い</sup> アカシデ<sup>い</sup>・<sup>い</sup> クマシデ<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 榎<sup>い</sup>・<sup>い</sup> イヌマキ<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 楠<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 枺<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 檜<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 赤松<sup>い</sup>・<sup>い</sup> 黒松等取り敢えず名前の特定が出来るぐらいにはなりたいたいと思うのですが、思いの外難しいのです。榎・楠・赤松・黒松と檜は即答できるほど解かるのですが、<sup>あと</sup>後が如何も駄目なのです。此れも年の<sup>せ</sup> 所為<sup>い</sup> でしょうか…。動物一般は動きもありそれぞれ特徴があるので、動物園に居る様な普通の動物は、よほどの珍獣でない限り名前が解からないことも少ないのですが…。そして思えば、甲殻類や昆虫類もその幼虫からして得意ではないかも知れないと思います。採ったり<sup>か</sup>・<sup>え</sup> 飼ったり<sup>か</sup>・<sup>え</sup> 孵したりはしましたが、例えば蝶の神様と云われるほどのことも無く、概ね小学校で遣るだけは遣って卒業した気で居ます。

その様な感じで好きとは言っても極めた訳でもなく、新星を見つける程の集中力も無く(財力と言うべきか…、家に天文台のある家も多くは無いが、<sup>わたくし</sup> 少なくもない)、私はただ好きと云うだけの事でしたが、それでも博物学的な分野が好きでした。困みに、社会科教諭にはなりましたが、実は趣味として歴史や人文地理に興味を持ちはしなかったし、法や規範には興味がありましたが、其れより自然科学的な方が実は遥かに好きでした。そして今思えば、今や父の目指した金属工学(此れこそ正に博物学的領域？ステンレスなど錬金術に近い…)の時代でも無く、同じ理工科系でも父の目指さなかった又は父の弱かった理工系の分野も広範囲に在ったのだらうと思った時、其れに挑戦してみたらもう少し父と話(喧嘩)出来たかも知れないと思うのですが、怒られる一方で、逆らう事ばかり考えていました様で文系がベストであったのか…？、後

悔先に立たず…の今です。

等と言っている内にちょっと太陽系天体を覗いてみたら、いつの間にか冥王星めいおうせいが太陽系惑星ではなくなっているのにはビックリ！ 2006年までの事であったようですが、ご存知でした…？ 16年前のその時は新聞を読んで「水・金・地・火・木・土・天・海・冥で無くなって海で終わりになるのか…」等と思ったのですが、すっかり忘れて子どもの頃習った通り、冥まで言ってしまうのです。ですから、今を知っておきたいのです、今の新しい理解を身につけておきたいと思うのでもあります。因みに、冥王星は太陽系外縁天体内のサブグループの代表とされており、準惑星に区分される天体であると説明されています。太陽系外縁天体とは何か…、やはり勉強の必要があるのです。

そして其れは兎も角、広く一般常識程度の博物学、私は未だいまだに関心を持って生きていきたいです、少年の様な好奇心を持って…。

処で因みに『学』ついでに、妖怪学なるものもあるらしいのです。妖怪学も博物学の範疇に入れようなどと私が思っている訳ではないのですが、学と付けば大学などで学部学科に設定されるものと考えられるが、妖怪学部或いは妖怪学科、はたまた妖怪コース等はなさそうですね。強いて言えば文化人類学とか、近世文学・近代文学とか民俗学とか日本美術史の中で其処をも研究して居られる方は居るかも知れません。因みに民俗学の範疇に入るのであろうが、学として成立するのは研究の仕様に掛かっているのであろうと思います。まかり間違えれば妖怪と言ったとたんに「何

に、言ってんの！」みたいに言われ、あしられそうですから…。妖怪とは、魑魅ちみ  
魍魎もうりょう ひやつきや こう・百鬼夜行の百鬼に当たるもの、換言すれば化け物たちです。其の化け物  
たちを誰が見、誰が語り、とどのつまり誰が考え出したのであろうか、妄想にしても如何  
にもユニークではないか…とは感じます。

井上 圓了いのうえんりょう先生は、その論文『妖怪学』の冒頭で、「応用心理学の一部として講  
述するものである」と述べていらっしゃいます。応用心理学ということばは井上圓了先  
生の造語ではなく、実際に心理学の分類上先ず大別して基礎心理学と応用心理  
学かたがたに分類できるそうです。しかし一方、井上圓了先生の業績として多くの方々が其  
処を外して讃えたようで、他に讃えられるべき業績があったからこそ他の多くの業績が  
讃えられたのであって、迷信を打破すると云うコンセプトのもとに『妖怪学』『妖怪学講  
義』が発表されたわけですが、その他多くの業績があつてこそであり、妖怪学だけでは  
「お化け博士」「妖怪博士」等と渾名あだなされるだけで、唯の変人扱いされていたのかも  
知れないです。しかし、井上圓了先生は仏教哲学者であり教育者であつて兎に角、  
現在の東洋大学の前身である哲学館を創設された方かたであり、また中央線中野駅  
のほぼ真北に四聖堂を建立し当時から其処を哲学堂と呼び、今日もその名が其の  
公園に冠されているのですから、間違いなく学者です。私は其の一方の変人側かも  
知れませんが今、博物学の他に妖怪学についても学習し直したいと思っているので  
す。

日本人は仏教の影響もあつて地獄・極楽の発想が根っこに在るかと思ひます。し  
かも一方その前に、古事記・日本書紀に出てくる黄泉よみの国・根の国の発想がありま  
した。人間の死、死後の世界への畏敬の念は太古の昔から永遠の禁忌事項として

あったと思うのです。黄泉の国や地獄等の異界と呼ばれる所には、如何にも妙な者たちが居るものですが、何れも人が考え出したものであり、妄想が生んだ物であろうと想います。実際に腐乱していく死体を身近に見られた時代だったのでであろうと思うのですが、しかし其れが如何してあの様な者たちを考え出せる切っ掛けになったのだから。それにしてもものすごい想像力だと思いませんか、もっとも逆に恐怖心が生み出したものとも考えられますが…。妖怪の文化が庶民文化に開かれるのは恐らく江戸時代になってからの事で、江戸時代で人が居る夜は其れこそ多くの妖怪の行列が見られたでしょう。現代の様にLEDで白々と明るく照らし出される夜では無く、何方かと云えば昼間でも闇のあった時代なのかも知れません。しかし、現代は現代で一層明るい故、暗さ・闇に弱いのではないかとも思う訳で、すぐ電気を点たがる人・点っ放しの人、多い気がするのですが…。

さてしかし、学としての妖怪研究を始めたのは上記井上圓了先生が最初で最後だと思いますが、しかし明治時代以降夫々の研究や興味の中の一部、或いはそれぞれの創作活動の中に、妖怪に特化した部分のある方は、再び登場の南方熊楠の他『遠野物語』の柳田國夫・『日本妖怪変化史』の江馬務・『妖怪と絵馬と七福神』の岩井宏實・『妖怪の民俗学 日本に見えない空間』の宮田登・『百鬼園隨筆』の内田百閒・『異界と日本人』の小松和彦・妖怪研究家の多田克己・『山怪実話大全』(編者として)や『百物語の怪談史』の東雅夫などがその名を連ねています。一方、江戸期からの美術では多くの浮世絵師：葛飾北斎・鳥山石燕・歌川国芳・月岡芳年・佐脇嵩之・河鍋暁斎などが挙げられ、文学としては、江戸期以降『雨月物語』『春雨物語』の上田秋成・『怪談』のラフカディオ・ハーン(小

泉八雲)・『変身奇譚集成』の谷崎潤一郎・『高野聖』『おばけずき』の泉鏡花・『かわいい黒い幽霊』の宮沢賢治・『たそがれ人間』の佐藤春夫・『怪談入門』の江戸川乱歩・『幻想小説とは何か』の三島由紀夫など、戦後漫画家では『ゲゲゲの鬼太郎』の水木しげる・『しろの百太郎』のつのだじろう・『まことちゃん』の<sup>うめず</sup>榎 暲(我が家の比較的近所、井の頭線沿線吉祥寺駅を出てすぐの所に赤と白のストライプの家にお住まいで、赤と白のボーダーのシャツを着て吉祥寺の街をさまよって居られたが、コロナになってからあまり見かけない様な…と言うか私が駅方向に行かないからか…)等の他、小説では『しゃばけ』の畠中恵・『巷説百物語シリーズ』等の京極夏彦・『沙門空海 唐の国にて鬼と宴ず』の<sup>ゆめまくらぼく</sup>夢枕 獯・『帝都物語』の荒又宏等、以上執筆活動の傍ら妖怪研究をされている方々も居られます。また『幻魔大戦』のように、SF作家平井和正と漫画家石森章太郎(いずみ・あすか名義)が共同原作の作品もあるのです。昨今でも少年漫画週刊誌などでは妖怪物が波状的に流行する傾向にありそうな気がしていて、最近では『鬼滅の刃』その少し前には『妖怪ウォッチ』や『怪物くん』『妖怪人間ペム』が子どもたちの間で<sup>はや</sup>流行ったが…、子どもは如何して妖怪が好きなのだろうか…？妖怪は子どもの仲間なのであろうか、子どもたちは怖がりなのに如何してなのか、<sup>どこ</sup>何処が好きになれるのだろうか…。

学として如何かは兎も角、博物学的分野や妖怪学についての私の今更の興味は、恐らく少年時代に極め損なっているからではないかと思っています。極めると言っても今時の子どもたち、〇〇線の駅名を順序良く言えたりは最早当たり前で、気象予報士の試験に合格したり漢字検定一級に合格する小学一年生のようなことが起こる

時代、子どもたちの興味の範囲も細分化され深層化している様に思う、私の様な年寄りより遥かに記憶力が良いはずの少年少女なのでしょう。また、私の様に気が散るのではなく、拘りが強いと云うか、ジックリとある事に取り組める少年少女が増え、その拘りを許容できる環境がある時代になったと思っています。従って子どもながらの一般常識も深さを増しているようで、その現状と比較すると私の特に博物に対する一般常識に不足を感じるのです。今更物識りになりたい等とは思いませんが、普通の生活をしている中で見聞きする事物・現象で知っている事を増やし・新たに覚えて知識として持っている事も増やしたいのです。これまで仕事に特化した事しか学習してこなかった50年でしたが、此れからはその前の20数年間の様なゼロからの好奇心を以て知ろう・覚えよう、更に森羅万象の彼是あれこれを吸収したいと思っています。

久良岐便り 別冊